

## 復興と文化遺産（巻頭エッセイ）

著者	関 雄二
雑誌名	チャスキ：アンデス文明研究会会報
巻	45
ページ	3-3
発行年	2012-06-16
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/5537">http://hdl.handle.net/10502/5537</a>

## 復興と文化遺産

関 雄二 (国立民族学博物館教授・アンデス文明研究会顧問)

福島を除けば、東日本大震災の復興は異なる局面を迎えている。とてつもない努力と忍耐の末に農業や漁業など地元の産業が再開されたニュースは、わずかな明るさとはいえ茶の間にも届き始めた。そろそろ出番となってくるのが文化であろう。確かに、文化財レスキューチームの活動は、昨夏より開始され、汚泥にまみれた文書、民俗文化財、考古学資料の洗浄が地道に行われてきたことは事実だが、ここにきて大きな問題として浮上してきたのは、津波被害を避けるために立案された高台移住など宅地造成に関わる埋蔵文化財の事前調査である。先ごろ文化庁は、試掘、発掘にあたっては、予定期日を厳守する旨の文書を各県に通達した。埋蔵文化財の調査が遅れることで、家屋を失い、仮設住宅で暮らす人々の移転がずれ込むことへの懸念からである。

さらにメディアの中には、堂々と事前調査をスキップしてでも、早急に住宅を含む都市計画を早めるべきだと主張するものまで現れている。遅々として進まぬ復興へのいら立ちを垣間見ることができる。「被災者の生活再建より考古学の発掘が大事なのか？」という発言は、どこかで聞いた覚えがある。そう、大学に籍を置いていたころ、医学部病院棟の建て替え前に事前発掘に従事していた学内の埋蔵文化財委員会のメンバーに医学部教員が浴びせていた言葉に似ている。「命よりも発掘なのか？」。

病院の例は極端にしても、ここには大いなる誤解があるような気がする。今回の震災で、政治家、知識人を問わず誰しもが口にする言葉は「今までの人生観を変えるべきだ、生活を改めるべきだ。」であった。では、その生活とは、人生観とはなんであったのだろうか。ただひたすら効率性を求める社会であり、直接的な関係を避ける非人間的な無機質な世界ではなかったのだろうか。それに疑問をいだき、いわゆる人間的な社会に飢えていた人々が多く存在していたことも事実であり、だからこそボランティアが参集し、その献身的な働きと、一方でそれを素直に受け入れる見ず知らずの被災者との絆がクローズアップされたのである。

しかし、ちょっと待てよともいいたいところがある。そうしたいわば人間臭さをこれまで世間に対して主張してきたのはいったいどの分野なのであろうか。これは間違いなく人文科学ではなかったのか。文学であり、歴史学であり、考古学であり、文化人類学であったはずだ。実験をすることができない人間であるからこそ、想像の世界で人間性の豊かさを訴え、また過去や現在の多様な世界観、生活ぶりを発信し、数多くの生き方、生き様を提示してきたのである。確かに、その伝達方法は、今日的とはいええない相変わらずの紙媒体中心であって、しかもそのエネルギーは以前よりは落ちてきていることも認めざるを得ないが、人間が幾世紀にもわたって

じっくりと練り上げてきた研究ジャンルには見るべきものがあるはずである。

人間は、自らの社会を築き上げるにあたって物質に働きかけ、それにより逆に物質が人間に作用する。その実践的な往還運動を通じて、自らの生きる場所ができあがり、その中で知らず知らずのうちにももの見方、身体の技法が形成されていく。震災後の避難民は、これまで生きてきた場所を失い、行政や研究者が立案する新たな土地で、初めから生きる場を作り上げていかねばならないのである。そのときに、彼らが働きかけ、働きかけられる物質は、新たに与えられる耐震構造を備えたコンクリートの住居や社会空間だけでよいのであろうか。打撃を受けた生業の道具、レスキュー隊が救い出す民俗芸能の衣装やそれを使った踊り、そして土地の歴史を語る文書や埋蔵文化財やその情報は不要なのであろうか。

私はそうは思えない。いわゆるこうした土地に根付き、あるいは潜在的に眠ってきた文化のメニューを並べていくことこそ、多様な実践の場を確保していくことにつながると考える。もちろん、だからといって、こうした文化的項目をそろえるために、何年もかけてじっくりと取り組むべきだなどという研究者エゴを押し出すつもりはない。

すでに行われているとしたら失礼な提案かもしれないが、漠然と考えているのは、全国の自治体から臨時に派遣された埋蔵文化財関係者が時間と勝負しながら行う活動を十分に尊重したうえで、新たな土地で暮らす予定の避難民が少しでも調査や整理作業に参加できる仕組みは作れないのかという点である。もちろん希望者だけでもよい。雇用の創出にまで行かないにしても、待ち受ける無機質な住空間を豊かにし、それこそこれまでの人間観とやらを再考するよい機会になるまいか。そのためには、行政と被災者双方の歩み寄りが必要であろうし、それを媒介するファシリテーターも重要になってくる。極貧生活がはびこる発展途上国における文化遺産を核にした社会開発プログラムの可能性に関心を寄せてきた者としてのささやかな願いである。

関 雄二 (せき・ゆうじ)

専攻はアンデス考古学、文化人類学。1979年以來、南米ペルーにおいて神殿の発掘調査を行い、アンデス文明の形成過程を追究するかたわら、文化遺産の保全と開発の問題にも取り組む。

単著として『アンデスの考古学』(同成社)、『古代アンデス 権力の考古学』(京都大学学術出版会)、共編書として『文明の創造力』(角川書店)、『アメリカ大陸古代文明事典』(岩波書店)、『古代アンデス 神殿から始まる文明』(朝日新聞出版)がある。